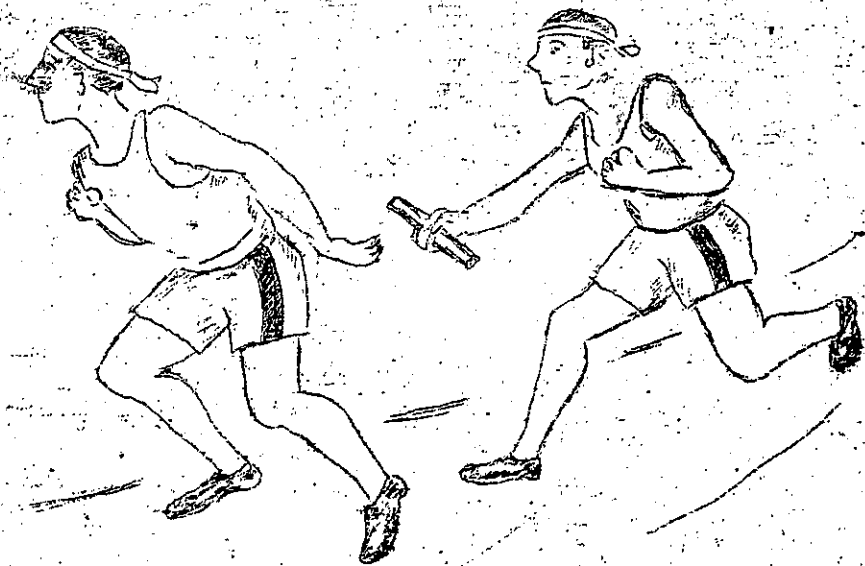


12
号月正 六之五

号四十七百第



28

學校日誌より

昭和十二年

十二月二十三日

煤掃ひ大掃除を行ふ

十二月二十四日

午前八時終業式舉行

昭和十二年

午後四時入營兵見送の為一同集合

一月八日

午前八時始業式舉行

一月九日

放課後書初展覽會準備

一月十日

書初展覽會開催 午前八時より午後四時まで

一般成績投票 午後二時×切 全三時發表

一月二十四日

卒業生送別競技會開催

得点 卒業組九三矣 在校組五九矣

御寄贈

一金拾圓也

保護者會基本金へ

高内和義殿

一金拾圓也

運動用具代トシテ

淺沼の不殿

送別競技會所感

藤川 生

送別競技會を一回を重ねるにつれて徐々に新記録があらはれを異彩を放つてゐる。例年の競技會は比べて今年には在校組が猛烈な気乗りや卒業組と若に熱があつた。選手諸君の練習は充分とは言へなかつたが可成りやつた。それにより予想よりなかつた程の好記録を出した事はすばらしいかつた。新記録をなした選手諸君自身すら不思議と思つたと思ふ。熱心者が斯く好成績を叩き出したのである。然しこの競技にも獲得の要領があるものだから、此の要領を呑みこめずには力の充分な發揮は望むべきと思ふ。いや相違なく練習した物と言ふかも知れぬが、いやまた不充分だつたと思ふ。即ち常理に向つてその練習がなされてゐる。

今年の勝敗の豫想はといふと卒業組では男子がよ、女子がよ、在校組では男子がよ、女子が優勢と見えた。私は在校組の女子が優勢で全勝しても競技種目が少いから卒業組の勝つてゐるを得るは予想しなかつた。然し女子は春組はセがあり男子にもあつて卒業に大番狂はせたりは結局九三封五九といふ開きはなつてしまつた。

何人と言つても菊田百造君の新記録百米(予約九十九)三枚跳(土米二四)に於てはすばらしい。黒川澄江さんのボール投(予約六五)は断然すばらしい記録でこの卒業組の元には大きな動音やもつていふすばらしい記録を出してすばらしい活躍をせせせの味もボール投に三回八〇といふすばらしい記録を出してすばらしい活躍をせせせの味も卒業が優勢(みだ)。卒業生も澄江さんの記録を聴いて驚いた。大いに期待してゐる。

私はどちらの組の作戦も知らず、が競技の順にしたがつて感じた。まあ、を書かつと思ふ。

百米走 記録 十五秒 (菊池安彦)

一等 菊池安彦(走) 十四秒九(走) 見野成美(走) 菅原芳朗(走) 菅本清(走)
兩組とも最初からよゝ顔がきつた。芳朗君は成美君の二人は在校組の花柄で
ある。四人共スタートはよかつた。五十米あたりでカートの時法原が足をもたふし
たのは誠に惜しかつた。八対三かと思ふが六對五となつて在校組も相対元気が
があつた。正道君は力走又力走、あつた小艇でよゝまかけた誠は將系が有望
である。只芳朗君が成美君がもう一つし正道君は成美君の足が思つたが。

百米(走) 記録 十六秒五(小沢温子)

一等 黒川澄江(走) 十六秒五(三) 高岡元子(走) 西村静江(走)
私は在校組からは静江さんと菅原君子さんが出るとかと思つた。女子は在校組は勝味
たつた。ありであつたが黒川澄江さんのスタートが大人しく他の三人は一歩位おくれ
れたと思つてゐる。在校組は女生徒を勝つて意気込みであつた。八対三
とあるが四對七となり差引一其の極をしたわけだ。之はあまり大きな予想だは
であつた。尚、在校組はあつた。スタートは遅くもあつた。が、困るをわらう。

三段跳 記録 十一米〇二 (八村大ワシントン)

一等 菊池安彦(走) 十一米〇二 (八村大ワシントン)
一等 菊池安彦(走) 十一米〇二 (八村大ワシントン) 直山宣夫(走)
京田正道君の最初の上果二回には皆な成績があつた。君もど一人は各人だらう。
他の三人は踏切切りが悪かつた。此の果を研究しよう。在校組は其の競
技に出る選手には随分苦い。お事と思ふ。誠は成美君が出るとどうかと思つたがさ
す。他の成績は成美君のさうで無理だ。

ボール投(走) 記録 三十二米九(菅本清(走))

一等 黒川澄江(走) 三十二米六五 榎村静子(走) 三十五米。村松富貴(走) 尚高元子(走)
ボールが落ちるが困る。それにもすばらしい記録だ。二つも新記録が出来た事
は珍らしい。平常の練習の時卒業組では二人だと思つたが在校組では君子
さんと菅原君子さんかと思つた。千代子さんも中々投げ手が。然しランニング
の馬力があるところから考へてもう少しがんばつてほしかつた。ボール投には
コツがあるだらう。此の果を考へて官原や君子さん、投げ手がよい。
君子さんが来る年澄江さんの記録をいれれば破るか希望してみたい。

砲丸投(走) 十一米三三 (ハーマンワシントン)

一等 菊池安彦(走) 九米八七 金川美次(走) 川崎正(走) 藤滝清(走)
四人共投げてからのガバリが足りない。身体を投げあげればよいわけでは
駄目だ。ハーマン君の記録は甚だ分破れないだらう。在校組から浅田君三君
を養成して出したらどうかつたらう。君三君は投げ方は上手なが、力があるか
ら練習すれば相対元気に投げられるだらう。鬼は角、体格と体力の両方あつた。
正君も高く投げてゐて損をした。少し研究して練習したらまた投げる。

走高跳(走) 記録 一米四八 (菅原君子(走))

一等 菅原君子(走) 一米三八 青木貞男(走) 藤滝清(走) 磯崎静夫(走)
平素、位と人か、菅原君も、藤滝清(走) 磯崎静夫(走)
後足の振りかへか出木なにかある。尚、体のわり具合の研究と足に弾力をつけ
て、おれつて練習されたいと思ふ。静夫君は、大出木だ。体の小よみが惜しい。

五十米(七) 記録 七秒五分(一) (イノエ、ワシントン)

一尋 西村静江(在) 八秒、磯崎秀子(在) 七秒、菅本良子(在) 安川富子(在) (在) 安川富子(在) (在)

体が小さくても在校組の二人は大へん速い。然し、二人共スタートは遅かった。静江の

走り出しは遅くスタート出来たり、新記録をつくったのはなかつたか。秀子との

差はトホトホかつた。良子も初陣のため場は馴れてゐないがスタートの遅い

一つの原因だつたらう。然し在校組の二人の素足の活躍を賞へておいてゐる。

四百米(四) 記録 一分五秒五分(四) (石津俊彦)

一尋 石井良子(在) 一分五秒、板東角男(在) 浅沼桂三(在) 沖山森一(在)

在校組は此の競走にも選手に若しんたのではなかつたか。最初からあまりはつきり

しつぱた競走だつた。桂三君は第一君共に相当な体力を持つてゐるがあまり

遅れすぎた。然して来月は相手が走らなう。良子も最初から

走幅(附) 記録 四米一三 (小祝温子)

一尋 毎田美津子(在) 三米九四、小祝温子(在) 磯崎秀子(在) 石井愛子(在)

平素の練習では秀子さんが一番遅いのであるが、調子が悪かつた様だ。踏切り

は四人共損をしたが、美津さんが一番よかつた。踏切りの練習、即ち根本の悪い

のは大へん損をする。此の競走も三秒も同じだが、疾走と踏切りが一番大切だと思ふ。

まして踏切線が疾走力が最高なわけだと思ふ。美津君は疾走と踏切りが最も上手いと思ふ。美津君は疾走と踏切りが最も上手いと思ふ。美津君は疾走と踏切りが最も上手いと思ふ。

は速いから疾走するが踏切線が一番速くなければならぬ。美津君は疾走と踏切りが最も上手いと思ふ。美津君は疾走と踏切りが最も上手いと思ふ。

を考へてやればもつとと思ふ。今後は、美津君を研究してほし。

走幅跳 記録 五米五五 (小俣喜一)

一尋 奥山良三(在) 四米五五、菅本清(在) 見玉成美(在) 川崎正(在)

成美君の活躍を樂しみにしてゐたが、成美君は斜に跳ぶくせがある。あれ

は大へん損だと思ふ。良三君は疾走が強いが踏切りが具合が悪い。

四人共此の疾走と踏切りを研究したうもつと。跳べたであらう。

リレー(安) 記録 一分三十一秒五分(四) (温子、曾代子、味子、イノエ)

一尋 組 黒川澄江、佐々木トエ、磯崎秀子、毎田美津

在校組 菅本清、西村静江、菅本良子、小宮シゲ子、高岡テツ子

在校組に勝味たつたが、いさやみて見ると、樂籠も出来なかつた。

静江さんのスタートは、實に見事だつた。百米や五十米でこの様なスタート

をして、水たまり、記録も破れたらう。四人の疾走は、追いつてゐた。兩組共

スタートに強い者を出したのには、妙を得た。栗野組は、中々立派な、体格や体力の肉付もあつた。

三人目のシゲ子さんと秀子さんと、競走の時、北側、スタートで秀子さんが振るかに

思つたが、振るかに思つた。新記録をつくつた。在校組は、全くよかつた。外一し

本業組だつて、強人の同着で、之も勿論、記録を破つてゐたと思ふ。今までは、これだけの

の長戦を、したリレーを見たら、事、が、ない。

リレー(思) 記録 一分十八秒五分(一) (第一、菅本良子、菅本清、菅本清)

一尋 組 菅本清、西村静江、菅本良子、小宮シゲ子、高岡テツ子

在校組 菅本清、西村静江、菅本良子、小宮シゲ子、高岡テツ子

在校組 菅本清、西村静江、菅本良子、小宮シゲ子、高岡テツ子

在校組 菅本清、西村静江、菅本良子、小宮シゲ子、高岡テツ子

女子と同様、藤下源一の生出したのは、南無かつた。在教組の正意がまうす。走つたらよかつたと思ふ。あまりに差がつきすぎた様がある。本意生の執録

は昭和四年のレコード以来初めてのことであつた。

マラソン(四) 記録 六分五秒 赤川三 (鈴木 春吉)

見玉剛美君(在) 六分 十秒五分 四 金川美次(在) 沢田長次(在)

磯崎時彦(在) 金川 幸雄(在) 大友善八郎(在)

在教組では、マラソンが盛んになり、出られたり勝つたり、が惜しい事をした。

成美君の一等はよかつたが、あまの一人が遅かつたため、遂に二失くさるひを

させた。然し、卒業生の金川美次君が二等に入つたのは、大人強味があつた。

成美君のレコードには従来、レコードに達しなかつたが、一等になつた事、は、

とんぱん力強く思つた事、たう、。是れも、他の記録に出たのを、

てマラソンだけは勝つのも、り、であつた。

以上長々と書いたが、何か参考になること、あつたらう。幸、あつた。今日より、明日、今年より、

来年と、並、精進して、好記録を作り、おす。共に、日、勤、務、神、と、金、を、高、体、力、増、進、と、

闘、つ、て、い、い、。乱、筆、身、は、判、後、と、い、い、。

終りに、諸君の、勉強と、運動と、が、平、行、(並、行)と、し、て、行、か、れ、ん、こ、と、を、希、望、し、て、筆、を、お、し、



◎オ正月

オ正月、か、来、タ、時、ハ、ト、テ、モ、マ、チ、ガ、
 シ、ダ、メ、カ、デ、シ、タ、ハ、ウ、バ、ウ、ノ、オ、ウ、チ、ニ、
 カ、ド、マ、ツ、ガ、立、ツ、テ、キ、マ、シ、タ、キ、ン、ダ、ノ、
 コ、ド、モ、ガ、キ、レ、イ、ナ、キ、モ、ノ、オ、キ、テ、
 外、デ、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、キ、マ、シ、タ、銀、を、
 ミ、ン、ナ、ガ、ツ、イ、テ、キ、ル、所、デ、イ、ツ、シ、タ、ニ、
 ツ、キ、マ、シ、タ、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、ア、ソ、ン、デ、
 キ、ル、ト、オ、カ、ア、サ、マ、ガ、ヨ、ン、ダ、ノ、デ、オ、
 ウ、ケ、ヘ、イ、ツ、テ、見、ル、ト、オ、カ、ア、サ、マ、ガ、
 オ、ネ、ン、シ、ニ、イ、ツ、テ、イ、ラ、ツ、シ、ヤ、イ、ト、ホ、
 シ、ダ、ノ、デ、私、ハ、ハ、ウ、バ、ウ、
 シ、ニ、イ、キ、マ、シ、タ、

◎オ正月

私、ハ、ケ、ワ、ン、ジ、ツ、ノ、ア、サ、ハ、ヤ、ク、オ、キ、マ、
 シ、タ、ソ、シ、テ、オ、ソ、ウ、ニ、ウ、タ、ベ、テ、私、カ、ウ、
 ニ、イ、ツ、テ、カ、ヘ、ツ、テ、キ、テ、カ、ラ、キ、モ、ノ、ヲ、
 シ、タ、エ、イ、コ、サ、ン、ト、ア、ソ、ビ、マ、シ、タ、サ、ウ、シ、
 シ、タ、ア、ソ、ン、デ、キ、ル、ト、シ、ツ、キ、ヤ、ン、ヤ、ク、ラ、
 チ、ヤ、ン、ガ、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、ア、ソ、ン、デ、
 イ、ヒ、マ、シ、タ、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、キ、ル、ト、ア、メ、
 カ、フ、ツ、チ、キ、マ、シ、タ、私、ハ、ガ、ツ、カ、ウ、ノ、
 ゲ、ン、ウ、ワ、ン、ニ、カ、ク、レ、テ、キ、ル、ト、ア、メ、ガ、
 セ、ミ、マ、シ、タ、マ、タ、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、キ、ル、
 ト、ボ、ヒ、ル、ニ、ナ、リ、マ、シ、タ、

◎ハ、ネ、ツ、チ、
 ウ、ザ、ハ、キ、ヨ、シ、
 私、ト、ツ、ネ、キ、ヤ、ン、ト、ハ、ネ、ヲ、ツ、イ、テ、
 キ、ル、ト、私、ガ、キ、ネ、ニ、ノ、ツ、カ、ツ、タ、ノ、デ、
 ツ、ネ、キ、ヤ、ン、ノ、オ、ニ、イ、サ、ン、ガ、ト、ツ、チ、ク、
 レ、マ、シ、タ、サ、ウ、シ、テ、マ、タ、ハ、ネ、ヲ、ツ、キ、マ、
 シ、タ、サ、ウ、シ、テ、私、ガ、ヒ、ト、リ、キ、ナ、ト、ウ、
 タ、ツ、チ、ツ、ネ、キ、ヤ、ン、モ、ヒ、ト、リ、キ、ナ、ト、
 ヤ、ウ、マ、シ、タ、サ、ウ、シ、テ、マ、タ、ツ、ク、ト、コ、ン、

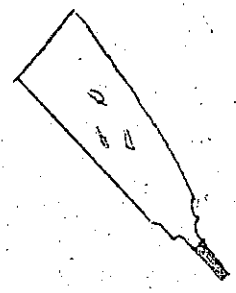


ドハツネヤマンノハネヤダカ
トリマシタツネヤマンノヤクニハ
ダタクサンマルトイツチ

オ正月ノイサカホヲアラツテエ
ハンヲタベマシタソレカラガツカウニ
イキマシタ

◎ヒメクニンイツシ イチネヒモシ
ボクハオ正月ニヒメクニンイツシ
ヲシマシタミツヤマンヤマヤキヤチ
トシマシタヒメクニンイツシ
ノヤチデ
一パンスエナノヲ一パンウシコニ
シマシタボクノスエナノヲイフト
キリタケノボルアキノニフダレ
マダフミモミズイヌノハシダネ
シルモシラスモオホヤカノセキ
ムベマカセヲイラシトノイラン
コレダケデス

オ正月ノイサカホヲアラツテエ
ハンヲタベマシタソレカラガツカウニ
イキマシタ
ガツカウデキミガヨトトシノハツメ
ネウタヒマシタソレカラダイジンケウ
ボクニオマイリニイキマシタ
カヘツチキチカラキモノヲキカヘテ
トシヤマントハネヲツマシタキ五
コヤマントガツカウニイツチアソビ
マシタニ日ニ山ミチヲトホツテ
オホヤウラニイツチオバアヤマンニ
オメデタウトイヒマシタ



つゞりかた

◎かゞみ

加藤 進

ぼくがかゞみを見ておたうじばん
のかほがうつたのでぶちま
とかがみがおれさうになつたの
びつくりしました。今度はかゞみの
うしろからぼくのかたをつかま

よくわかります。今度は目を
つぶつてうつして見ますと見えま
せん。かほをかゞみにすりつけて
よこの方を見ますとまっすぐ
では見えな、ものがうつります。
いくらうやってもうつるのでしまひ
にほおもしろくなくなつたのでやめ
ました。

◎かゞみ

矢堀 宏

といろくかんがへてもわかりません
今度はかゞみをまげて見ますと
た、みがまがうつります。
今度はおかしをたべた所をう
つして見ますとおかしがうつた
のでつかまうじするときえてしま

ぼくがかゞみをとりたい、庭へ
でてげんごわんからうつして見たら
うつりません。ぼくはしゃくに思
つてすてようとしました時ひろさち
んが来て

ひました。おかしなと思つて今度は
小さいかゞみをもつてきて見ます
とかがみの中にまたかゞみが

かゞみをうつしてゐるのかい。
といひました。ぼくは
うつしたいけれどうつらないだ
といひました。ひろさちんは

うつります。木のゆれでゐるのも

かげでうつすからだよ。

といったので、今度日は日がてつ、
 てある所からうつしたりひろき。
 ちゃんか

「まがしいじゃ。」
 といいました。ぼくはしばらくうづ
 してうちへかへりました。

●かごみ

山田 娘

ぼくのうちにかごみがあります。ぼ
 くがかごみを見るとぼくのかご
 出すと、光がうつります。しらなくて
 弟のかほをうつすと

「まがしいな うるさい。」
 といひましたからよしました。また
 お日さまのところにえらすとうつ
 りません。すみのついたかごみをか
 びみでうつすと、儲むりがでてき
 てみんなやけてしまひました。しろい
 所をーしゃうけんめい やまましたか

●おもち
 石津 秀子
 わたくしは かあちゃんにおもち
 をやいてもらひました。
 すこし たつとおもちがふくれた
 しました。かあちゃんか
 「おもちは くらるとみずの
 中にぶっこまれんだよ。」
 と、きかして、くれました。
 あたしは
 「かあちゃんにんげんも かくれる
 と、ものおきの中にぶっこ
 まれるんだね。」
 といひました。

「をはりし



◎明治神宮

石田 セン

東京に行った時の事です。一月二日は後田
 のおぢさんとお昼頃明治神宮にお参りに
 行きました。いひだしたおぢさんと電車に
 乗って行って代々木で降りかへて原じゆく
 で下りて明治神宮に行く道を通りますと
 人が大勢なので、「おぢさん、此の道を通
 る人はみんな明治神宮へお参りに行くの
 ですか。」と聞きますと、おぢさんは

「あ、さうだよ。みんなお参りに行くのだ
 よ。大勢の人だらう。」といひました。
 なかく着かないので、「まだ、明治神宮
 は遠いの。」と聞くと、おぢさんは「ま
 だよ。」といひました。いふく、
 明治神宮に着きました。みんなおさ

カノノが走り出した。水の上をすいくと
 走る。たゞ波をさる者だけか聞える。
 僕は何となく心がひきしまつて来た。お日
 様が輝く水面にみられると、いふた手をた
 いてをかんた。お日様はたちまち西の方へ
 はいりいりました。西の方の空はあかるくな
 つて少しすきとぼつて見える。とても美しい
 カノノは勢がついてすうくと走る。

◎夕方

菊池 三考

銭をあげて一匙けんめいにをかんでおます。
 私をかごみをはつてから帰らうとすると
 よその子がおぢさんおぢさんとおぢさんとした
 ので、その子のあかあさんが「おぢさん、
 取るとおぢさんがおぢさん」と言つたので
 その子は、おぢさんおぢさんおぢさん
 帰りに、新じゆくにまつて行きました。帰ら
 つかあ、おぢさんが「つかれたでせうから
 早くねなさい。」と言つたので早くねました。
 ねる時は明治神宮の事を思ひました。

だんく、暗くなって来る。それでもカー
はすいくと来る。いつの間にかやりカノー
は海岸に着いて来た。

◎悪い事 浅沼ハマ

私は今まで悪い事をして来ました。それ
で皆さんにしんばいをかけたおます。私
は悪い事をしなばかりあるので、永田先
生が、私を毎朝お宮に連れて行つておま
したのが、昨日の事、私が悪い事をしま
したので、先生が、「ハマ子」とおっしゃい
ました。私は「はい」と言つて
先生のそばへ行きました。私は、何だか
思ひました。すると先生が、「お前は神
様の物までもとつて、神様にはおま
るが」とおっしゃいました。私は、心の中
で「悪くみがおかつたのか」と思ひ
ました。すると先生が、「もうお前は神様
にまわしていいから」とおっしゃいました。
私は、今まで先生のおかげで悪いことがなほ

いぶん悪いことをしてしまひました。
さうして私をおまつてくれる人はないのと思
ひました。ほんとに私が悪かつたのです。
こんどからは先生がおまつてくれなくても私
が一人でなほさうと思ひます。
何だかしらやんがどうしてお前のばあちゃん
がしんばいつうになつたのかおたし、知つてお
るよ」と言ひました。私が「どうしてな
つたのだ」といひましたら、「あのね、お前
が悪いことをしてばかりあるからだよ」と
言ひました。私は「あ、さうだよ」と言
ひました。もう、私は「悪いことはい
ません」。

◎(終)

悪事があるさきとはありましたが作者の心が
よく出ておます。悪いことは自分から作ら
なくしてはなほりません。悪い事はばかりして
おると誰からも天にはれず、悪いと知つた
らどんな事があつても決していじないやうに
まつたはほしてよい子になりませう。

トん四

作文



杉山榮子

◎お正月

お正月はどうしてこんなふうなうれしいのでせう。
暮の中から家ではソウ／＼仕たくをしたりお女
さんお母さんはおしきうでた。いよくいよ
夜の鐘がなつて元旦になれば日の丸の旗や門松
がどこの家にも立てられて暮の中がすつかり変
つたやうに思はれて、新しい気持ちで致します。
私はこれが一ばんうれしいのです。あとそやお
をうにをいって学校へ行き、式をすませて
父神様へお参りをしました。それから家へ帰
つて着物をきかへ羽根をつきました。夜はか
らどらんがをしました。三日の間、ほんとに楽し
くおすごしました。門松がとれたらほんとに喜
びました。ほんとにうれしいお正月でした。

◎顔のすみ

沼田順子

お正月に姉さんと風船つぎをしました。私が
落したり墨つけたりと、姉さんはいふと私
をんかつけられたいといふた。
「ヒト」で、もう私が落した顔の真中に
大きくXとか、れた。今度こそはと思つてつ
いた、「……」と、七つまでついたらと喜んで
おると、「しまった」と思つたが間に合はな
してしまつて墨をつけられた。それからも負け

◎初日の出

菊池吉彦

元旦に早く起きて外へ出てみると朝日山の

朝日山の上

通して真意はなつてしまつた。そへ郵便やさん
 が年賀状を持ってきたので私が受け取らうと
 すると何かおかしいやうに笑つて帰つた。その年
 賀状をお母さんのと二つへ持つて行くとお母
 さんわくわく笑つてなりしやる今度ば羽根つ
 をしやうと思つて外へ行くと小母さんお笑つてお
 らひやるので、どうしたの小母さん羽根つ
 といふとおかしやうにまづかひを見つてこら
 んとおこしやりましたので、急いで家へ歸つてか
 ひみを見たらうおかしいやう取かしのやう思は
 れ「アハハハ」と笑つたお母さんお大さな聲
 で笑はれたりの間に飾りもまて大笑をし
 てゐました。

御飯さま、

幸田 邦子

朝起きると間もなく箕田さんで母を呼ぶに
 きた。母も人はちやうど御飯さまを呼ぶとし
 てゐました。私は「母ちゃん私がたいてあげるよ」と
 いった。私は新聞紙の入つてゐるかまどの中にマ
 ツチをすて入れたをさして、まきをくべた。ボウ

ボウと紙の見える音。しばらくするとバチンとい
 う音にかまどの下をのぞいたり、まきに火がうつ
 ちかちか君子をみておく改とあつた。私
 は水を入んて来ておちやわんを洗つた。おちや
 を出したり、おせんぼをしてしたり、おちやを
 君子は自分のおちやわんを取つて「御飯
 とさけんだ。私は間に合はなひのでおちやを
 入れて洗つた。君はあちやわんの中をのぞ
 くと「ふらふら」といった。私はおちやをみた。す
 るとお汁があつた。おちやわん、おちやうと、かま
 どの下をみたら火が燃があつたので、セリんで
 火を起しておちやをかけた。そのまに御飯
 が「アツク、アツク」とおちやを水がたたく
 音をたたく火を取りをさしとあつた。おちやを思
 ひ出して、おちやを取つてみたかおちやがたたく
 あつた。おちやをさすとうるさく、アツク、アツク、
 おちやがたたくおちやをさす。おちやをさすおち
 やをさすおちやをさす。おちやをさすおちやを
 取つた。出来上ららうおちやをさす。

尋 五 級 方



お正月

河野 政雄

「ゴケゴツコ」と鶏の聲がした。僕はすぐ
 に起きた。今日から一ヶ月を取つて十二才にな
 ったのだ。風があつてゐると見えてうなり
 こそが聞える。着物のまゝ風を持ち出して
 あげに行つた。よくあがつた。ふいに風が吹
 いてくると自分が風にもつていかれるやうに
 しめる。もうおぼんを食べる時だと思つて
 かへつて見たがまだは度かしてなかつた。
 「おちや、おちやさんの所に年賀に行つておちや
 と母が言つた。信夫とのおちやと三人でいつ
 た。おちやさん「おちやさん」といふとおちや
 さんが「おちやさん」といふた。おちやさん
 しおちやさんからおちやさんおちやさん
 おちやさんにまじりおちやさんおちやさん
 くんおちやさん。

昭和十二年を遊へて

田代 美穂

昭和十一年も終へて昭和十二年になつた。
 早いものだ。元旦には楽しくあそんですごし
 だ。おちやさん「三学期になつて八日から學
 校が始つた。
 昭和十一年には勉強もろく／＼せずにはいたの
 はおちやさんだつた。昭和十二年の三学期に気が
 ついてもおちやさん「もつと／＼勉強し
 なくては良い人にはなれぬい、これからは
 あそぶのにも一時間あそんで二時間勉強する
 やうに元旦にきめた。昭和十一年より十
 二年はしつかり勉強しやう。

鯨

浅沼 庫雄

「おちや」と汽笛をならしたから彼をけたて、
 帰つてくる捕鯨船、鯨がとれたのだ。
 すぐ捕鯨会社の方へ走つて行つた。その間に

もう鯨を引き上げている。ざんげと横腹
ふかく長刀をつきさして切り始める。
バリバリと皮が落ちていく。遂に頭だけと
なる。その時又「おれ」と流石ななりし
ながら清瀬に向つて走つて来る。あや又取
れたのだ。今年はずつと鯨が取れる年だな
と思つた。

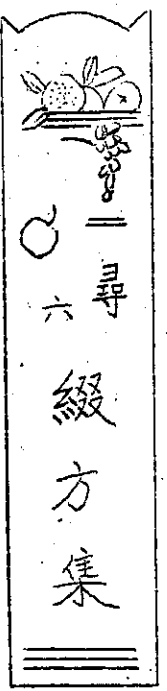
石田 テル

トランプ
「子ちゃん」 「おれ、だれだい、何だ俊ち
やんか」 「もう貞枝さんの所にいつた」
「んもう一回行つて来たよ」 今夜着物着
て来るよ、待つてよ、そして俊ちやんと
貞枝さんの家へ向つて行きました。
貞枝さん、お前達待つていたよ
貞枝さん、ダウトしやうぢや、うん
間もなく弥生さん清ちやん美穂ちゃん恒ちや
んも来た。
同り、子ちゃん番だぢや何ホヤ〜として

「おれおやほら、出すよ」
他のを出して知らん顔してゐた。
貞枝さんのお母さんが来て「お前たちが
〜」といふもんだから康徳が「〜」とねけ
けて言つてゐる」といつたので皆笑つて
きました。

小水津 きぬ子

「おまつ風」 「おれ、幸四郎さんが取つた、
おれはまだ一枚も取れない、もうあきて来た。
「おれ、トランプしやうよ、ね、貞さん」
「ん、みんな賛成した、一人初めにバケ
きをした、私の手にはバケがにぎられてゐる
私は心配だ、心の中で、早く人の手にはわら
ない、負けたらみかん五ツふいにさると
つた、あとに残つてゐるのはバケとハートの
七だ、貞さんは七をさつてゐる、さつさつ
ふつと力をいたのです、心配のバケはやつ
幸四郎さんの手にはいつた、安心してお母
さんに言ひだつたよ」といふと何だか「おれ
と言つたのでみんなに笑はれた。



年頭の感 後藤茂義

来る三月で尋常六年の義務教育が終るとも
う一人前の大日本帝國の國民となるのである。
僕はこれで學校をおりるかとも知れない。そうす
ればもう自分を叱る先生も居なく、なすが僕は
六年の間各先生のお話になつた人としての
道國民としての道を正しく行つて行くのだ。
とへ悪い友達が百人よつて自分をせめても自
分は正しく生きやう。又大日本帝國の非常時
もいよく追つて来た。この小笠原へもいつ敵
が攻めて来るかも知れない。その時は僕も小笠
原ながら決死のかくごでこの島を守り大和魂
を見せてやらう。

元日の朝 佐山和子

早く起きて外に出た。あたりは薄暗くまだ

家の中から電氣の光がまれてゐる。すがくし
い朝の空気を吸ひながら今年はどうして暮して
行かうかと考へた。新春を迎へ十四になつて嬉
しいやうな氣持をした。台所で用をしてお母
さんがお正月の朝は若水を汲むものだよといはれた。
若水を汲みお湯に入つておせんに向ふ。
おめでたうございませう」とあいつをすませる
と父は「今年はおつぽどしつかりないとだめだ
ぞ」とおつぽどしつかりないとだめだ
に参拜に行く。手を清め、今年も家中の無事を祈
つた。かへると今度は學校に行く。誰の顔にも
新春を迎へたうれしさがあふれてゐた。

百人一首 笹本良子

二日の夜、大勢人が集つたので百人一首をしま
した。みんなうでまくりをして待ちかまへてお
ます。讀手は元へんとせきげらひをうて、よみ始
めました。秋の田の」とよむが早いのか、心をも
うだれかの手がとびました。みんな上手で私な
ど一枚も取れません。夜の更けるのも知らず力

ル夕取をつづけておます。夜まはりかがち／＼一人で夏海の家からうんとこいで来る。自轉車と拍子木をたいて家の前を通りました。ふと気がつく。時計はもう十二時を過ぎておます。「それではおそくなつたからもうやめやう」といってみんなかへつて行きました。急にがらんとすいた部屋に時計の音がかち／＼とひびいておます。

◎ 自轉車のけいこ 重田 實

僕は秋葉神社にお参りしてから鉄工所へ自轉車を借りに行つた。小林さんが乗れるかときいたから「乗れませう」と答へた。家の前をいよいよ習ひ始めた。おつこつて／＼とこいで、前を見ておて、真直に進んだら、おのれらと教へてくれた。それでもなかな／＼うまく行かぬ。昌英君が「おのちやん、僕がつかまへてみるからう」といひでござらん。はなやな／＼から平氣だよ、といつて後をおさへてくれた。自轉車はやうやく進んだ。しばらくそうやつて、かり今度は

一人で夏海の家からうんとこいで来る。自轉車はすう／＼と進んだ。やあ、おのれらと教へてくれた。それでもなかな／＼うまく行かぬ。昌英君が「おのちやん、僕がつかまへてみるからう」といひでござらん。はなやな／＼から平氣だよ、といつて後をおさへてくれた。自轉車はやうやく進んだ。しばらくそうやつて、かり今度は

◎ 僕はテツビンである 佐々木晴治

僕はテツビンである。僕が或日金物屋の店に往來をながめてゐると、男の人が来て僕をつれて行つた。其の家につくと、知合の釜君やお鍋さん等が居た。やがて主人は僕の腹に水を入れて、火鉢にかけた。尻がだん／＼とやけて来る。おつ／＼と僕は思はず泣き出した。それを見てお鍋さんが「やっ、リテツビンでも泣くんだね」と笑つた。僕はなにく／＼と思つてもう泣かない事にした。今ではもうすつかりなれてあつた。おつ／＼と思はな／＼。どん／＼と事でもがまんして、立派な鉄板にならうと思ふ。



笹口 芳朗

海は青々としてどこまでも廣がり、何ものをも呑みこんでしまふやうである。又波際には、波を立てて、小石を洗つてゆく。海の眺は、いかにいはいはれない趣がある。沖合には釣をする舟の白帆が見え、近くは小魚が群をなして泳いでゆく。夏になると水泳の人も出て、海岸はにぎやかだ。又水面は朝日夕日に色どられ、輝いておる。朝夕の海も、きれいである。夜の海はまた格別である。海上は暗黒の幕にとざされて、漁火の波間に出没する有様。對岸の灯が風防林の木の間がく水にもれ出づる有様は、何ともいへない趣がある。明け方となれば、漁師は舟下りの沖をさして出かける。今日のえものを胸にいたきながら、カヌーの白帆は、一ぱい風をはらみながら、勢いよく／＼と進む。夜となれば、夜釣の人が波止場の沖、黒岩の沖へと出てゆく。それにくらべて、冬は海は何となくつめたさうであり、又波までが、さか／＼と音をたて、おる。海を

植野 干代

ながめる人は、きつと夏海を思ふであらう。いよいよ算術の時間となつた。鉛筆を持った。何だか気がくしゃ／＼して、何にもしたくない。皆一生懸命にやっておるやうだ。私は鉛筆をおいた。ふと外を見ると、二宮尊徳先生が新を背にしなから、本をよんでおられる様が、何となく氣高く見えた。と同時に、もうた私達は一生懸命に勉強しなければならぬのだと思つた。さう思つた。さう思つた。さう思つた。心がひきしまるのを感じた。私は再び鉛筆を持つた。先生が問題を出された。私は一生懸命考へた。やがて出来たので、先生に見てもらつたら、幸ひ出来ておたので、うれしかった。これも二宮先生の賜かと思ひ、益々尊敬の念を深くした。

佐々木 繁小

僕は五時半頃海岸に行つた。朝の氣持ちは何ともいへない。あちらこちらで「お早様」といふ氣な聲が聞える。たしかに洲崎に仕事に行く人

達の聲であらう。だん、あたり一面がぼんぼりとおかしくなつた。僕はお寺の下の海岸へ行った。あちらこちらに漁師が沖へゆくのが見え、やがて捕鯨船もいかりをあけて出て行った。すると近くにはおた漁師がみんなちやんカヌーをおろしておくと、たのび加勢をして出た。その人は「おりがたうの聲をきこして出て行った。又大正丸も出てゆく。きつとウメイロをとりゆくのであらう。僕はほんたうに、静かな朝だなあ」と一人つぶやきながら我が家へと足を運んだ。

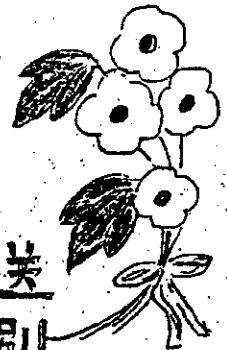
石津岩子

幼い頃から家も近かつたせい、か竹のよかつたひいちゃんも別れてから早二ヶ年の歳月は流れた。今だに手紙のやりとりも絶えたことはない。ひいちゃんの手紙は字もなつかしく中には「裕福さな生活の有様や女学校の様子などが想像もつかぬように書かれてゐる。小さな時の事を記憶してみると何から何までなつかしい思い出の種となる。幼孫も遊びもいた

づらも一しよにしたことなど、おはさん、ひいちゃん、おの歸る年に、おはさんは「お岩ちゃんこれが最後の誕生祝です」と洋食までとって御馳走して下さった。又歸るときには、形見の指輪まで、いたいた。東京で巡り合ふ日の一日も早からんことを唯一の願ひとしておる。ほんとうに幼馴染の思ひ出ほどなつかしいものはない。

高崎輝子

あがれの遠足も豆問違ひだ。去年の記憶を思ひ返して、懐かしい話にふけるのである。今年の遠足も友達と「リツヤツク」を背おて山に登る姿が、ありと頭に浮かぶ。おれを思ふとなほ遠足が待ち遠しい。遠足は後戻りも、いやだなあといふ気は起らない。遠足は字の通り、遠く歩くが、おれが楽しめた。いつもお顔の先生もニコニコと生徒達の遊びたはむおのを見守つて下さる。あゝ遠足はなんといふも、楽しい日だ。待ち遠しい遠足。



高級方

送別競技會

走 高 跳

石井良郎

僕はこの送別競技會は最後の競技であるから、死力をつくして戦はうと心の中で思つてゐた。順番は段々すきていよいよ僕等の番が来た。跳ぶ前には身ふるひかして仕方なかつた。併し一回跳んだらもう平氣だつた。五段六段と跳んだ時には足が痛み出した。これは級のためと思へばなんでもないと考へて最後までふんばつた。とうとうハ對ミで大勝利を得た。

競技會の朝 金川美次

びゅう／＼と云ふものすこい雨、風が目ざまました。寢床をのり起きてガラス窓

を開けてみると外は大嵐の如く、風に木の枝がゆれてゐる。あゝ我等が待たれた競技會も、これでは日延かと思つて時計を見た。針は三時の所をさしてゐたので、え、出来なかつた。のちらゆつたり寝ようと思つた。再び床に入り、競技會のことを考へてゐた。あゝこの間は、眼に落ちてしまつた。夢に浮かぶものは、競技會をしてゐる我等の姿ばかりだ。時計が三時を打つ音に二度目をこました。さつとあれ程時化てみた。外は真一、なぐなり寶玉をちりばめた。やうに星がきら／＼と光つてゐる。やあこれ、助かつた。早く夜が明けくれ、はよいと思つた。何處か一番雞の鳴く聲が微かに聞えて、二番雞三番雞の鳴くにつれ、東の空が白み始め、終に旭は登つた。いそいで顔を洗ひ運動仕度をして家を出た。學校へはもう大勢きてゐた。昨夜の雨で出来なかつたと思つた」と云ふ言葉が、あち／＼と聞えてくる。午前八時半には競技會が開始された。

■ 競技會の朝 夜沼ヤツ子

一月二十四日は卒業生在校生の送別競技會である。勝つても負けなくても楽しい。目をさまして時計を見ると六時であるが庭はまだ薄暗い。なにか雨模様がある。私は急いで二はんを食べた。その中に扇浦の方が真暗になつたかと思ふとシートと雨が降り出した。私は今日はどうも出来ないと思つたけれど雨が小降りになつたから學校へ行った。もう大がや友達も来ず着物など着かへてゐる。應援の生徒はいろいろとお返しやうな手傳つてやつた。支度の出来上つた頃には雨はやがて青空が現はれた。のうれしきはたつちやうかたつた。

■ 競技會の朝 佐々木きくゑ

雨がさあ／＼降つてゐて競技會は出来ないと思つてゐると友達が私を呼びに来た。私はびく／＼して寝床を跳起きようとしたら目がさめた。お母さんがもう起きろといふと云つた。

あゝ勝つてよかつたと思つて外に出て見るとなにか薄黒い雲が出てきた。間もなくすると大つぶの雨がぽつぽつ／＼落ちて始めやがてあ／＼とおそろしい大雨となつて来た。障子がびしょ濡れになつた。急いで雨戸をしめると又すぐにやんで日光が射して七時頃はよい天気になつた。私はいそいで家からとびだして學校に行つたらもう尋常科の生徒は旗をもつて跳廻つてゐた。卒業生は買けるよと男の子たちはさわわつてゐる。私は買けるものかといつちの中を強く叫んだ。

■ マラソン 無名氏

順番は進んで一番危いと思つたマラソンは目の前に来た。選手出場とみるや否や旗をもぎとり應援に出た。空はカラリと晴れていい、天気だ。風はくさくさはたは波は少なくてさけて砂を洗ひあたかも僕等の勝利を祝つてくれるやうだ。

▲この編方は上手で、エッセイの名前が書かされておもしろい。

【後略】

順	種目	得点	実在	本年レコード	氏名	在来レコード	氏名
1	百米(男)	5	5	14.70秒	原田正道	15秒	菊池安彦
2	百米(女)	7	4	16.50秒	黒川澄江	16.5秒	小祝温子
3	三段跳(男)	8	3	11.24米	原田正道	11.02米	小祝温子
4	ボール投(女)	7	4	26.65米	黒川澄江	22.99米	小祝温子
5	砲丸投(男)	8	3	9.87米	板東角男	11.33米	徳本曾代子
6	走高跳(男)	8	3	1.38米	井良部	1.48米	ハートマン
7	五十米(女)	4	7	8秒	石村静江	7.5秒	ハートマン
8	四百米(男)	8	3	1分15秒	石井良郎	1分12.5秒	石津俊彦
9	走幅跳(女)	7	4	3.94米	母田美津	4.13米	小祝温子
10	走幅跳(男)	8	3	4.85米	興山良二	5.35米	小祝温子
11	リレー(女)	3	7	2分30秒	西村静江 小祝温子 石村静江 母田美津	2分31.5秒	金子代子
12	リレー(男)	7	3	2分13.5秒	黒川澄江 板東角男 井良部	2分18.5秒	金子代子
13	マラソン(女)	12	10	6分27.5秒	足玉成美	6分11.5秒	鈴木春吉
合計		93	59	◎印は新レコード			

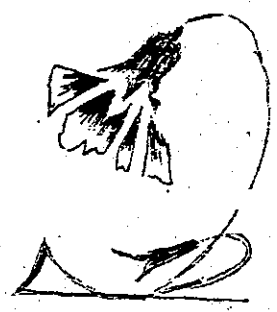
昭和十二年度送別競技會

● 競技會 = 際石坂殿ヨリ石坂御座贈カカリレタ。

本年度書初展覽會成績

<p>尋一 一等 鶴沢キヨシ〔三三票〕 二等 菊井弘子〔一九票〕 三等 横山喜久子〔一四票〕</p>	<p>尋二 一等 沖山みさ子〔三九票〕 二等 杉山昌夫〔三〇票〕 三等 横山 昭〔二七票〕</p>	<p>尋三 一等 渡辺三朝〔四三票〕 二等 永田稔威雄〔三五票〕 三等 市木 晃〔一八票〕</p>
<p>尋四 一等 平野昌代〔五一票〕 二等 藤滝静子〔三〇票〕 三等 杉山榮子〔一九票〕</p>	<p>尋五 一等 重田弥生〔五四票〕 二等 横山秀雄〔四〇票〕 三等 小林五郎〔二六票〕</p>	<p>尋六 一等 奥山昌英〔四二票〕 二等 鶴沢 寛〔三一票〕 三等 菊池照子〔二二票〕</p>
<p>高一 一等 奥山宣夫〔四七票〕 二等 藤滝 清〔四二票〕 三等 佐々木 繁〔一五票〕</p>	<p>高二 一等 佐々木 勇〔二八票〕 二等 原田正道〔三八票〕 三等 板東角男〔三三票〕</p>	<p>女青校 一等 佐藤ゆき子〔三三票〕 二等 菊池初枝〔一九票〕 三等 佐々木コミエ〔一五票〕</p>
<p> 一等 高崎輝子〔三四票〕 二等 沖山茂子〔一九票〕 三等 菊池かつ〔一六票〕</p>	<p> 一等 笠本 清〔一五票〕 二等 水野朝子〔四一票〕 三等 金原くま〔三三票〕 三等 毎田美津〔二七票〕</p>	

尚展覽會ニ際シ左ノ如キ御親切ナ御投書ガアリマシタ。
 イツレモ仲々上手デ選擇ニ苦心シマシタ。コノムラノ無イト云フ事カ何事ニモ大切ト存ジ
 只感服ノ外ハアリマセン。希クハ全教科ニ互ツテ益々御熱心ナ御教道守ラヒ



競技會を歌ふ

時は來たれり 今日こそは
 わか大村の 競技會
 たまは茂れる 校庭に
 いざ戦の幕 ときらん

S.S. 生

大平洋のそよ風に
 ひるかへわたる 應援旗
 熱誠こある 鼓聲援に
 死力つくせよ 戦はん

見よや我等の 溢る力
 聴けや我等の 勝利の歡呼
 知れや我等の 正義の誇

卒業生
 在校生

第七十四号 昭和十二年一月号 大村尋常小學校存之編輯部發行

